

# BOOK TRAIN

ブックトレイン

千代田図書館  
学校支援担当発行  
冬の図書だより  
2017  
中学生版

中学生の皆さんにおすすめの本を紹介します。



のマークは気軽に読める本、



のマークは読みこたえのある本です。



## 『そして、ぼくは旅に出た。 はじまりの森ノースウッズ』



大竹英洋/著 あすなろ書房

大いなる先人たちの背中を追った青年は、今自分の道を歩き出す。

自然写真家、大竹英洋氏の原点となった三カ月間の「精神的探求の旅（スピリチュアル・クエスト）」を振り返ったエッセイ。「ノースウッズ」と呼ばれる北米の湖水地方で、たった三つの手がかりを頼りに世界的写真家、ジム・ブランデンバーグへの弟子入りを目指す旅は、冒険小説さながら。憧れや尊敬の先に、自分の道を見つけようと模索する旅は、人生のヒントであふれている。



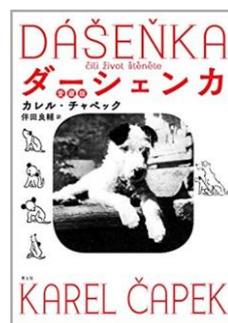
## 『ダーシェンカ 愛蔵版』



カレル・チャペック/著 伴田良輔/訳 青土社

ダーシャ。少しのあいだ静かにしていたら、お話をしよあげよ。

チェコの国民的作家にして愛犬家のカレル・チャペックによる“犬本”。フォックステリアの小犬、ダーシェンカについてのエッセイと、ダーシェンカのために語ったおとぎ話。巻末に収録された愛らしい小犬の写真と、随所に登場する素朴で味のあるイラストも見どころ。クスッと笑えて心があたたかくなる、世界中の犬好きに愛される一冊。



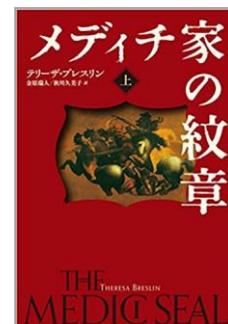
## 『メディチ家の紋章 (上)・(下)』



テリーザ・プレスリン/作 金原瑞人、秋川久美子/訳 小峰書店

16世紀のイタリアを舞台にした、メディチ家をめぐる歴史ミステリー。

盗賊に追われ瀕死に落ちた少年マッテオを救ったのは、あのレオナルド・ダ・ヴィンチだった。字の読めないマッテオだが、ダ・ヴィンチに気に入られ工房に迎え入れられる。それでも追手がくるのは、マッテオの持っているあるものが関係していた。史実を基にした、最後までハラハラドキドキの物語。読後はダ・ヴィンチの作品を改めて見たくなる。





## 『羅生門・鼻・芋粥ほか』

あくとたがわりゅうのすけ  
芥川龍之介/著 教育出版



ひとは悩む生きものである。

失業し、生きるために犯罪を肯定しようとする下人（「羅生門」）、顔にコンプレックスをもつ僧（「鼻」）、人からバカにされる人生の中、芋粥をたくさん食べることを夢見る侍（「芋粥」）、自分の評価を気に病む作家（「戯作三昧」）、屏風を描くために人を見殺しにする絵師（「地獄変」）。人々の生き様を面白く、残酷に、そして切なく描いた5話。わかりやすい注釈付き。



## 『夜間中学へようこそ』

えつこ  
山本悦子/作 岩崎書店



学ぶことの楽しさに気づいた時、きっと世界が違って見えるはず。

優菜のおばあちゃんが、夜間中学へ通いたいと突然言い出した。おばあちゃんの話に、驚く父と応援する母。あることをきっかけに、おばあちゃんと一緒に夜間中学へ通うことになった優菜は、それぞれの事情を抱えながらも熱心に勉強をする、年齢も国籍も様々な人たちと出会う。「なぜ勉強をするのだろう、学校へ通うのだろう」と思った経験のあるあなたに。



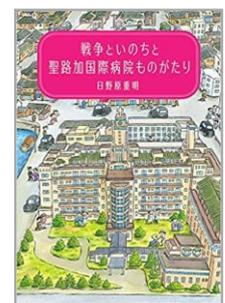
## 『戦争といのちと聖路加国際病院ものがたり』

ひのほらしげあき  
日野原重明/著 小学館



「ゆるし合う心」から生まれるものとは？

「戦争やいじめは、人間が人間を愛したり、尊敬したりする当たり前の心をくわせてしまおうおそろしいもの」一。太平洋戦争時、すでに現役の医師として病院で働いていた筆者が、戦中戦後を通じた現場での体験と思いを、静かにやさしく語る。今年7月、105歳で亡くなった聖路加国際病院名誉院長の日野原重明氏が103歳の時に出版した本。



## 『舟を編む』

みつしをん/著 光文社



言葉の海を渡る舟。その制作に携わる人々の熱い想い。

2018年1月、『広辞苑』が10年ぶりに改版される事が話題になっている。辞書の改版には長い年月を要するが、一から辞書を作り上げるためには果たしてどれだけの時間と情熱を要するのだろうか？ この本は、辞書編集部へ異動になった青年、馬締が個性的な仲間たちと共に、人生をかけて一冊の辞書を編み上げてゆく長編小説である。

